

諏訪哲郎教授と教職課程を共に歩んで

齊藤利彦*

SAITO Toshihiko

まずは、諏訪先生のこれまでの歩みを簡単に紹介させていただきます。

先生は1949年に宮崎県でお生まれになり、大阪の北野高校を経て、1974年に東京大学大学院地理学専攻を修了いたしました。その後民間企業への就職を経て、1979年に弱冠29歳の若さで本学教職課程専任講師に着任いたしました。

当時、教職課程は専任教員4名という小さな所帯でしたが、先生はその後41年の長きにわたり教職課程の文字どおりの中心として活躍してこられました。

さらには2013年に教育学科を創設して以後も、学科の牽引役として、初代学科主任を2期4年にわたり勤められ、学科の屋台骨を築いてこられました。

その間、1994年から4年にわたり、学校法人学習院の企画部長に就任し、女子短大から4年制学習院女子大学への改組転換等、大きな事業を成し遂げてこられました。

私は、1985年に教職課程に着任したのですが、それ以来35年にわたり、諏訪先生と共に奉職できましたことを、たいへん嬉しくかつ誇りに思っております。

先生は、常に私の一歩先を歩んでくださったのですが、先生が職場での様々な課題に直面したときの、リーダーとしての公平さ、判断的的確さ、そして粘り強さに何度も眼を開かされたことを思い出します。

ご研究の面では、先生は1988年に論文「西南中国梨族の農耕民性と牧畜民性」で東大理学博士号を取得した俊英であられたわけですが、狭い領域に閉じこまることなく、次々と時代が求める研究課題に挑んでこられました。

何よりも実証的なフィールド・ワークを重視し、また会長として日本環境教育学会等の関連学会や市民団体をも巻き込み、それらの中心の担い手として大きな研究成果を生み出してこられたところに、先生の面目躍如を感じます。

さらには、日中韓の多くの若手教師や研究者と共に、優れた共同研究を行ない、その中から多くの人材を育てています。その最新の成果が、持続可能な社会の構築を根底に据えた教育システムやSDGs、「学校教育3.0」への取り組みです。それらの詳しい内容の一端は、先生の著作『学校教育3.0』（三恵社2018年）や『事典 持続可能な社会と教育』（日本環境教育学会ほか編、教育出版2019年）を参照していただければと思います。

さて、そうした諏訪先生と歩んだ教職課程・教育学科の道筋において、大きな節目は何度もありました。

1997年には、田中真紀子氏による議員立法「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律」が制定されました。これにより、義務教育段階の教員免許状を取得する場合は、「介護等の体験」が必要となりました。

霞ヶ関にある文部省の大会場で、田中氏の説明を聞きながら、単位化はされないにも関わらず、いわば事実上の「必修」とされることへの、カリキュラム上の矛盾を感じたことを覚えています。

2000年には、戦後最も大幅な教育職員免許法の改正がありました。取得すべき単位数が大幅に増加し、「総合演習」や「教職実践演習」等の新しい科目も定められました。教育

* 学習院大学文学部教育学科

実習もそれまでの3単位から、中学校は5単位へと増加しました。

本学でも教職課程カリキュラムの大幅な改訂が求められ、当然に全学部・全学科に関わる課題であったため、諏訪先生と分担し、各学科への説明に回ったことを思い出します。

新カリキュラムを制定する過程では、むろん文部省との交渉も必要となり、諏訪先生と共に、いくどか文部省に通ったことも思い出されます。

2008年には、当時の安倍内閣の下で、「免許状更新講習規則」が定められました。それまで教員免許状には「更新」という概念はありませんでしたが、10年を単位として更新が義務づけられるに至りました。

そして2013年、教育学科の創設を実現いたしました。そのことは、諏訪先生と私、長沼先生の教職課程3人のスタッフで、その3年前から議論を始めていた課題でした。学科ではなく、教育学部の創設という構想も存在していました。

当時の学長であった福井憲彦先生や文学部長の高埜利彦先生、さらには次の文学部長に就任した神田龍身先生に構想を聞いてもらい、また事務部門との折衝や会議等、様々な課題をこなしたことを思い出します。むろん、文科省への設置認可申請書を作成し、いく度にもわたる交渉や打合せも行なわなければなりませんでした。

新たな教育学科のカリキュラムの構成、新しく設置しなければならない教育学科棟や理科室・音楽室等の特別教室、そして様々な施設・設備、さらにはスタッフもそれまでの4人から12人へと増え、非常勤講師等を含む教員組織を整えるべく努力しました。そうした課題の遂行は、2015年から開設した大学院教育学専攻の修士課程・博士課程の創設にまで及びました。

以上の道筋のすべてにおいて、諏訪先生のリーダーシップに負うところが大きかったです。

さて、教職課程はこれからも様々な課題に直面しながら、学習院大学の教員養成を担い続けていきます。また、教育学科はまだ7年目を向かえたばかりです。このような時期に先生がご退職されますことははなはだ大きな痛手ではあります。

しかし、今後とも先生に安心して悠々自適なご生活と、活発なご研究を行なっていたいただくために、私たち一同は心して頑張らなければならないと思っております。

諏訪先生の益々のご活躍とご健康を祈念しまして、この文章の終りとさせていただきます。